

Catwalk



【特集】

『娑婆 身体表現クラブ』

まつもと市民・芸術館
Matsumoto Performing Arts Centre

vol.
10
2026
Summer

「受刑者の役をするわけではない。自分たちのことをします。」と事あるごとに言い続けていたのは、刑務所をテーマにダンス作品を作ります、という前提のものに期待されるのは、刑務所の中っぽさ、受刑者っぽさ、であると想像できたからです。私は様々な舞台作品を作ってきましたが、自分が自分であることから逃れられないと考えています。私たちは「捕まっていない」「こちら側にいる」という普段意識する必要すらないことを、改めて自身に突きつけられることになる。

身体には、その人が生きてきた中で蓄積してきている癖や、器用さ、不器用さ、問題点、生きづらさ、逆に生きるためにしてきたことなどが必ず乗っかっていると思っています。それは、私にとっては既にその身体が習得している振付であり、その人の強度です。

ダンサーとしてトレーニングをしてきているわけではない演者たちの根底にある芯の身体にアクセスするために、即興で動いてみる、まずそこに立ってみる、というリハーサルを繰り返しました。その中で、だんだんその人の「強み」が見えてくるんですね。それは同時に「弱さ」であったりもします。そういったものを抱えながら、私たちは現代社会のルールに乗っ取り、道を外れないように、得体の知れぬ他者と共存している。

一見うまく取れているように見えるコミュニケーションの裏側に回ってみる。うまくやってきたように見える身のこなしを疑ってみる。その中で生じる軋みを微調整しながら身体（自身）を保っていることが、娑婆（この世界）で他者と共に生きていくということを選んでいるという態度ではないでしょうか。

倉田 翠

娑婆

身体表現クラブ



Review

倉田翠の新作『娑婆^{しやば} 身体表現クラブ』が初演された。松本少年刑務所（長野県松本市）の受刑者と塀の中で過ごした2年の歳月から着想を得て創作したダンス作品だ。

倉田は、社会に生きるヒトたちと協働する作品づくりに取り組んできた。2024年4月まつもと市民芸術館の芸術監督に就任し、自分の培ってきた協働創作の経験を地元で活かしたいと考えた。そして、松本少年刑務所には全国で唯一、刑務所内に公立中学校のあることを知ってコンタクトを取り、所内のクラブ活動の講師を担当することとなった。

「身体表現クラブ」と名付けられたクラブ活動では、音楽に合わせて一律に踊るようなことはない。起床から点呼までの日常生活や、木彫りの刑務作業など、隔離され規律に縛られた日常の動作を抽象化して再現してみたり、自身で考え即興的にムーブメントを生み出したりしてみる。娯楽のない刑務所内は雑音が消え、受刑者はみな素直で、その身体は生々しく美しかったという。倉田がキャスティングに一年かかったという『娑婆』の出演者5人にもクラブ活動を見学してもらい、その場の空気や受刑者の佇まいを感じてもらう時間をとった。

フラットな舞台。中央にパイプ椅子が一脚、奥にも椅子の奥や脇、客席通路などから現れて佇む。中央の椅子の上に立った倉田が話し始める。「私たちは受刑者ではありません。また、受刑者を演じているわけでもありません、私が、私の方が捕まってなくてよかったなど、ここに居られてよかったなど、思ってる?」。前田斜めが下手脇にある壁のスイッチを入れると蛍光灯が点き、ヘリコプターの音が高鳴り、何か作業するようにも見える動きを繰り返す。中二階

から監視するように見下ろしていた花形慎は舞台に下り、何やら日常的にも見えるムーブメントをこなすと、中央で真上を見上げ「蛍光灯」「外がどこにもない」などと時折呟く。西田悠哉は椅子を一脚持って下手側に置き座るが、突然立ち上がり薄ら笑いを浮かべる。やがて、問わず語りにインテリ風な話を述べ始めると、堀田康平が子どものように屈託ないおおらかな声で訊く。「西田くん、菜の花咲いたねー」「そら豆って、枝豆のお父さん?」。西田は話を遮られつつも堀田の質問に即答するが、どうにも噛み合わない。中條玲だけがまるで間違っ場に入ってきてしまった少年のように空間で起こることを俯瞰している。何気ない話し声や動作に、やがて不穏なバイオリンやチェロの軋む音が重なり、緊迫感が高まっていく。そのように作品はスタートした。

「娑婆」とは、刑務所の外の自由な世界を指す言葉として使われがちだが、そもそもは仏教用語で苦しみや不自由を耐え忍ぶこの世（現実世界）を意味する。塀の内と外の境界線はどこに引かれるのか? 刑務所という特殊な場所を題材にしながら、塀の外で自由を謳歌しているはずの私たちが生きるこの世界もまた、形を変えた不自由さや生きにくさを抱えた「娑婆」に他ならない。

倉田を含む各自が自問し、自分にとっての不自由さや生きにくさを探った。その振る舞いや事象を丁寧に掬い取り、微に入り細に入り、切なく愛おしくシーンを描く。解像度の高い倉田の視線が現実の社会を逆照射する。不条理な日常で、自らの生を剥き出しにして息を吹き返せる、唯一無二の居場所こそが「劇場」であり、「舞台」なのだと信じて。

堤 広志（舞台評論家）



『娑婆 身体表現クラブ』
2026年4月18日(土) 14:00
4月19日(日) 14:00
まつもと市民芸術館 小ホール
構成・演出: 倉田 翠
出演: 中條 玲 西田悠哉 花形 慎
堀田康平 前田斜め/倉田 翠



みんなのコンサート『はじめて!』
2026年4月26日(日) 11:00
松本市音楽文化ホール(ザ・ハーモニーホール)
出演:石丸幹二 木ノ下裕一 倉田 翠
クリヤ・マコト(ピアノ) 林周雅(ヴァイオリン)
JKim(キム・ジューヒョン) マー・ジンジン(揚琴)
林周雅ストリングス
(篠原悠那 中 恵菜 西方正輝 鈴木智)

みんなのコンサート

『はじめて!』

3回目となる「みんなのコンサート『はじめて!』」は、改修工事中の芸術館を「飛び出し」て、音楽文化ホールでの開催だった。

開演前の会場は、赤ちゃんの泣き声が聞こえたり、「まだ外で遊びたかったあ」とすねる子もいたりして、普通のコンサートのほじまりとは違ってざわざわしているのが、かえって微笑ましい。

明るいままで始まったコンサートは、はじめから最後まで、テンポよくワクワクする構成になっていて、子どももおとなもその世界に引き込まれた。

あれは即興なのか、倉田さんのガチの踊り。目の前で音楽に合わせて自由に体を動かし踊る倉田さんを、はじめからこまめにびくりしたような目で見つめていた年長さんくらいの男の子は、いつの間にか両手を大きく動かしている。

「幸せなら手をたたこう」で、嬉しそうに手をたたき足をバタバタさせていた2歳くらいの女の子は、Amazing Graceの時には、おばあちゃんの腕の中で気持ちよさそうにすやすや眠っていた。

子どもたちがそんなふうに音楽の中に溶け込んでいくのを見ることは、私をとっても幸せな気持ちにさせた。そして、なにより石丸さんはじめ、出演している人

たちすべてが、この空間をころから楽しんでるのが伝わってきて、自分のこころも体も開放されて気持ちのいい脱力感の中に浸った。

今回は、東アジア文化都市松本の企画の一つとして、キム・ジューヒョンさんの韓国の童謡や、マー・ジンジンさんの中国の伝統的な打弦楽器「楊琴」の演奏があった。楊琴は私も「はじめて!」でその美しい音色は心にしみ、芸術や文化の多様性にも触れることができたように思う。

このコンサートは3人の芸術監督の際立った個性や専門性が生かされながら、芸術が特定の誰かのためのものではなく、みんなのためのものであり、そして、全ての人のこころの中にあるものだということ、楽しく見える化してもらったように思う。

まさにほんとうの「みんなのコンサート」だ。

この「はじめて!」が、10回も20回も「はじめて!」として、ずっと続いて欲しいと思いつながら外に出ると、空は松本ブルー。豊かに満たされた気持ちで帰路についた。

西森尚己

(子どもの支援・相談スペース「はぐルッポ」代表)



『Step into the world from Matsumoto』
2026年5月22日(金)～24日(日)
まつもと市民芸術館 小ホール
指導・監修:倉田 翠
出演:女屋理音 櫻井拓斗 宮 悠介 ほか

3人のダンス作家が向き合った〈作品を作ること〉 Step into the world from Matsumoto

「自分にとって、ダンスとは何か、作品を作るとは何か…一緒に考えたい」。舞踊部門の芸術監督である倉田翠が自ら伴走し、ダンス作家の育成を目指すプロジェクト「StepM」。約1年間にわたる創作期間を経て、その成果となる女屋理音・宮悠介・櫻井拓斗の新作公演が5月に行われた。

女屋理音は『雪嶺』で、音によって動かされる体と、それが喚起する記憶や風景との関係を探った。動きを触発するドラムの音と、拗ねた子どものようにも、動物のようにも見える女屋の踊り、そして家族（と思しき人物）に関する発話。これらの要素が絡まり合い、憤り、不安、怯え、淋しさ、静寂、恋しさ……といった情景が、舞台上に立ち上がっては解けていく。静と動を激しく往復するからこそ、途中、観客に背を向けて立つ女屋の後ろ姿は多くを語っていた。

壮大でキツチュな音楽とともに幕を開ける宮悠介『春』は、踊ることの純粋な喜びや狂気をひとつずつ検証するように組み立てられた作品だ。冒頭、インターネットミームから着想を得た動きや独自の言語のようなジェスチャーが、拍子抜けするほどのユルさで示される。しかしその後には爆発的な音楽と叫び、バク転、

そして自身のトレードマークである髪型を崩しながら見せる動きが続き、芽を出そうかどうしようかと迷う、まさに「春」らしい蠢きが満ちていた。ときおり聞こえてくる小さな鳥の鳴き声や時計の針の音は、舞台上の出来事を現実になぎとめているようでもある。

自身も含めて3人が出演する櫻井拓斗の『不快な居場所脱出装置の発明』では、まるでゲームのような世界観が展開する。すごろくのようにひとつずつマスを進む男、そこにやって来る男と女。天井から降り注ぐちいさなアヒルたち、匍匐前進するスパイダーマン。何かの儀式のように振り付けられた動きとナンセンスな反復のあいだに繰り出されるのは、「ここから脱出したい」という叫びのような踊りだ。装置は相当に複雑な構造のようだが、頭が理解するより先にハッと心を打たれる舞台上の光景に、人と人のわかりあえなさ、すれ違い、それでも共に存在することへの思考が垣間見えた。

いずれも昨年12月の試演会を経て、各自の問題意識を深めながら完成度を高めていた。それぞれの切実さや踊る理由を込めた作品が、これからどのように世界に羽ばたいていくのかにも注目したい。

白尾芽（ダンス研究／編集者）



StepMのウェブサイトでは、育成過程のレポートや、育成対象者によるテキストを公開中です！ <https://www.step-matsumoto.com/>

まつもと市民芸術館 芸術監督団团长・木ノ下裕一が率いる木ノ下歌舞伎の『心中天の網島』が、『アクセシビリティ版』となって登場します。当館では2024年『三人吉三郎初賀』以来、2年ぶりとなる本作は、演出・作詞・音楽を糸井幸之介さんが担当。初演・再演を経て3度目の上演となる今回、より熟成された劇世界と、アップデートされた作品の見どころをお届けしましょう。

「心中天の網島」あらすじ

大坂（大阪）天満にて紙屋を営む治兵衛は、妻子ある身ながら、遊女の小春と深く馴染み、ひそかに心中の約束をしていた。ところがある日、治兵衛は、小春が「死にたくない」と漏らすのを耳にする。激怒した治兵衛は小春に別れを告げるが、小春はひそかに治兵衛の女房・おさんの頼みを聞き、わざと愛想づかしをしていたのだ。

この事実を知った治兵衛は、小春がひとりで死ぬつもりであることを悟る。治兵衛とおさんは小春を助けるため策を練るが、おさんは実父・五左衛門の手で実家へ連れ戻され、夫婦の計画は潰えた。その夜、治兵衛は小春を連れ出し、死への道行を歩みはじめる……。

そもそも「心中天の網島」とは？

「心中天の網島」は、江戸時代を代表する

劇作家・近松門左衛門の代表作。初演は1720年12月・大坂竹本座、近松にとって最晩年の作品です。

『日本のシェイクスピア』といわれる近松は、人形浄瑠璃の世界に「世話物」というジャンルを確立しました。歴史上の事件や伝説、実在の人物を描く「時代物」に対し、「世話物」は名もなき市井の人々が織りなす物語。そのなかに当時の家族や経済、世間の空気やルールといった『リアルな社会』が浮かび上がるのが特徴です。

1703年、実在の心中事件から着想した「曾根崎心中」を発表した近松は、これを皮切りに生涯で24作の世話物（心中物はそのうち11作）を執筆。「心中天の網島」も同じく実際の心中事件を題材に、治兵衛、小春、お

木ノ下歌舞伎『心中天の網島』アクセシビリティ版
6月の神奈川公演を皮切りに全国9都市で上演！（松本・東京公演の詳細は14ページ）
チラシのビジュアルは現在の網島の風景。



木ノ下歌舞伎

『心中天の網島』

アクセシビリティ版



さんの3人を中心に、悲恋と家族、人情、そして女性同士の義理を描き出した名作です。

木ノ下歌舞伎版の見どころ

タイトルの「網島」は、心中事件が起こった実在の地であり、治兵衛と小春が心中する場所。初演当時の観客にとっては、ついこの間起きた悲劇を生々しく思い出させる地名でした。かたや「天の網」には、古代中国の『老子』にある「天網恢恢疎にして漏らさず」、すなわち「天に広がる大きな網は、必ずや罪を見逃さない」という意味も含まれています。網島で起こった、名もなき男女の心中事件。しかし、そこには「天の網」から逃れられない人間たちと社会の切実な問題がある――。

木ノ下歌舞伎では、「心中天の網島」を2015年に初めて上演する際、糸井幸之介さんに演出・作詞・音楽を依頼しました。日常の営みから宇宙・神話の世界までを股にかけ、人間や性愛のいとおしさと愚かしさを包み込むように描いてきた糸井さんの作風と楽曲が、この物語を現代に蘇らせるうえでびつたりだと考えたためです。

もともと近松の原作は人形浄瑠璃であり、「語り、うたうこと」を前提に書かれたもの。木ノ下歌舞伎版『心中天の網島』は、原作に忠実かつ、糸井さんの解釈と想像によって豊かなふくらみを得た音楽劇となりました。現

代語（糸井語）のせりふと歌、そして歌舞伎の言葉が融合し、大坂の心中事件が、やがて想像を超えるスケールへと広がってゆきます。

『心中天の網島』アクセシビリティ版へ

今回の『心中天の網島』アクセシビリティ版は、これまで創作のみならず鑑賞サポートにも注力してきた木ノ下が、「作品そのものにアクセシビリティを組み込みたい」との思いで手がけるものです。手話通訳と日本語字幕が作品と一体化し、音声ガイドも全ステージで実施。9年ぶりの再演にあたって台本を再検討し、舞台美術や衣装も一新する、まさにリクリエーション（再創造）版となります。旗揚げ20周年を迎えた、木ノ下歌舞伎による『古典を現代にひらく』取り組みの最新形。『心中天の網島』とアクセシビリティの密接な融合を、糸井さんは「作品をより普遍的にすること」だといい、「これまで以上に成熟した舞台にしたい」とおっしゃっていました。くしくも、初演・再演では治兵衛や小春、おさんたちを縛り、からめ取るものの象徴だった「網」ですが、今回、糸井さんには「人々をすくいとる網」というイメージがあるそう。ふたたび、新たな『心中天の網島』が誕生することになるはずです。

稲垣貴俊（木ノ下歌舞伎）

古くて新しい「かぶき」の魔力

今年の夏は歌舞伎がアツい！ 7月10～12日には芸術監督団団長・木ノ下裕一主宰の木ノ下歌舞伎『心中天の網島』アクセシビリティ版、さらに17日、18日には花組芝居『レッド・コメディ〜赤姫祀り〜』が上演されます。古典歌舞伎を現代に新たな舞台作品として立ち上げる木ノ下歌舞伎と、「ネオかぶき」と称して39年、独自の世界を築いてきた花組芝居。その魅力を掘り起こすべく、花組芝居の座長・加納幸和を迎え、木ノ下との対談をお届けします。新しい視点を持った歌舞伎の舞台という共通点だけでなく、木ノ下の、花組芝居の大ファンだった話も飛び出しました。

加納幸和（花組芝居座長）

木ノ下裕一

加納幸和 Yukikazu Kanou

兵庫県出身。日本大学芸術学部卒業。1987年『ザ・隅田川』にて、花組芝居を旗揚げ。来年、創立40周年を迎える劇団の座長として、脚本・演出を手掛け、自らも女形で出演。座外への客演・演出・脚本提供や、映像にも進出。女形指導、母校の日藝・カルチャースクールでの講師、NHK歌舞伎生中継の解説も務めるなど、多方面で活躍。西瓜糖『ご馳走』、花組芝居『毛皮のマリー』で、2019年前期の読売演劇賞演出家賞にノミネート。

木ノ下 花組芝居は1987年立ち上げ、来年で40周年。加納さんは私が

とても尊敬している演劇人なんです。私が高校生だった2003、4年頃に

花組芝居の存在を知り、多感な時期に初めて拝見して非常に衝撃を受け

ました。こんなお芝居を作りたいなと思って、その後大学で木ノ下歌舞

伎を旗揚げするんですけども。花組芝居がなければ、私は今演劇を作っ

ていないんじゃないかと思うぐらい、大変影響を受けました。

加納 申し訳ございません。そんな

道に引き込んでしまっていましたか。木ノ下 恐れ入ります。加納さんは、

子どもの頃から歌舞伎がお好きだったんですか？

加納 物心ついた時には歌舞伎って単語を知っていました。

木ノ下 それはすごいことですね。加納 「ママ」「パパ」の次に「歌舞伎」

を覚えたほんです。たまたま遠い親戚に芝居好きがいて、僕が興味

を示しているようだからと、3歳の時に歌舞伎座に行ったのを記憶して

います。日本語もうまく喋れない時に見ているので、もちろん内容は全

然わからないんですが、目の前で繰り広げられている現象は面白かった。

木ノ下 歌舞伎俳優になるっていう選択肢はなかったんですか？

加納 実はありました。しかしその気になったのは小学校に上が

がって10歳ぐらいだったんです。その頃に読んだ、写真がとても

多い入門書があって、解説文は読めないけれど、写真を見て楽しんで

いた。その本に、歌舞伎の俳優さんは子どもの頃から始めて、楽屋でう

ろうろ遊んで、いろんなことを覚えていくんだよと書いてあって、私は

手遅れだと思ってやめたんです。

木ノ下 そうだったんですね。私は大

学生の時、2006年に劇団を旗揚げしたんですが、その時は、今の歌舞

伎に対して、もっと違う解釈でもできるとか、もっといろんな型、演出がか

つてあったのに画一化しているとか、なんでこの場面をカットするのとか、

フラストレーションがあって、じゃあ自分で作ってみようという衝動にな

ったんですが、加納さんの劇団旗揚げはどんな衝動からだったんですか？

加納 僕は現代演劇の俳優になりたいと思っ

て、日本大学芸術学部に入りましたが、大学を卒業してプロにな

ったんですが、加納さんの劇団旗揚げはどんな衝動からだったんですか？

加納 僕は現代演劇の俳優になりたいと思っ

て、日本大学芸術学部に入りましたが、大学を卒業してプロにな

ったんですが、加納さんの劇団旗揚げはどんな衝動からだったんですか？

加納 僕は現代演劇の俳優になりたいと思っ

て、日本大学芸術学部に入りましたが、大学を卒業してプロにな

です。

木ノ下 今私たちが思ってる歌舞伎は伝統芸能としての歌舞伎ですけど、江

戸時代では現代劇でもあった。そもそ歌舞伎には、いろんな演目のいいと

ころを取ってくる花組芝居みたいなス

タンスの頃があったわけですね。加納 そうですね、その感覚で江戸時

代の歌舞伎は作られていました。当時の大流行、先端を行って

た。例えば当時常磐津が流行したら、すぐにそれを取り入れようぜ、とかに

ならって、僕らも洋装を取り入れてみたかどうか、それに合うように音楽は

フルツにしましょう、みたいな。木ノ下 「綺麗な交ぜ」といって、既存

の関関係ない作品を複数結びつけて一本新作を作る、そういう趣向も江戸時代

にやられていた。そしてその最新系が、おそらく今回の『レッド・コメディ』

赤姫祀り』。加納 ええ。舞台は戦争直前の文壇で

す。当時の文豪たちっていうのは破天荒な方が多かった。なぜかという

と、自分が経験したことを書く、という私小説なるジャンルが生まれて、それ

ならば、と自分の人生を面白くしようと思ひ始める人が出て、そうしてその人の人生が破綻していくわけですね。



歌舞伎の世界のぐちゃぐちゃしたものを、薬漬けになったり、恋愛におぼれたり、性別を越えた関係に踏み込むような混沌とした文壇の人間関係に置き換えて、そこへ正気を失った歌舞伎役者が入ってきて……という愛憎物語になっています。

木ノ下 赤姫を女形の加納さんが演じられているわけですね。

加納 はい、庶民が持っているお姫様のイメージを究極にしたのが赤姫という役柄なんです。

木ノ下 そんな赤姫が登場する歌舞伎のお芝居がふんだんに劇中に盛り込まれている。

加納 初演は14演目でしたが、今回再演にあたって1演目増やしました。

木ノ下 この1作品で赤姫のお芝居が15本も見れて、ちゃんと本編にも絡んでくる、これがすごいんですよ。

加納 現代の部分は作家の秋之桜子さんに書いていただいて、そこに僕が劇中劇を決めて、共同で脚本を作っています。

木ノ下 はめ込んでいくわけですね。歌舞伎を知り尽くしているからできることですね。

加納 いじつちやいますからね。

木ノ下 僕は2024年の初演を拝見

して、すぐに松本で上演しませんかとお話をしました。感動したのは赤姫の豪華さ。同時にこれだけいろんな赤姫を見ると、歌舞伎って女性の情念、あるいは気持ちとか、純粹さ、抑圧とかそういったものを、しっかり描いてきたんだなというのをすごく感じました。

もう一つは現代パートのセクシュアリティの描き方。あまりいうとネタバレになりますが、現代パートで描かれる恋模様が、性の多様性といったものを汲み取っている。ある種同性愛的なものっていうのは歌舞伎にとってもすごく大事なテーマなわけで。能においても世阿弥と足利義満から続く、同じく非常に重要なテーマなんです。芸能における「性」というものと、切り離し難い業のようなものを、ものすごく丁寧に掘り取っていらつしやるのがとても現代的だと思いました。狂気と正気の境目、ジェンダーの境目、劇中劇とリアルな境目、いろんなボーダーがこの2時間で大きく揺らぐという。加納 そこは本当にやりたいテーマでした。一方、木ノ下歌舞伎が取り上げるのは近松門左衛門の『心中天の網島』。木ノ下 はい、『心中天の網島』は、近松門左衛門の心中ものの最高傑作と言われたりしますが、もともととは浄



舞台写真 2024年初演より（撮影：古元道広）

瑠璃作品です。三味線と太夫さんの語りですから、全部が一曲の長い曲だというふうにも解釈できると。それならば、近松の音楽性を原作に近い形でちゃんと上演しようと思って、糸井幸之介さんという演出家に演出・作詞・音楽を依頼しました。糸井さんは「妙ージカル」という独自のスタイルを持っている方。今回は、普通のミュージカルとはちょっと違う「妙ージカル」のちからを借り、音楽劇的なしつらえにして、上演いたします。さらに今回はアクセシビリティ版としてリ・クリエーション。手話通訳と日本語字幕、音声ガイドも全ステージで実施します。

木ノ下歌舞伎が花組芝居と違うところは、古典の歌舞伎の演目を、基本的にはストーリーを変えずにやるところ。そして、毎回演出家と俳優を招いて作るということです。今回、お話しして、現

代口語口調で歌舞伎の台詞を喋ったり、言葉は歌舞伎でも、衣裳は現代的だったり、という木ノ下歌舞伎がやっていることは、もう20年前に花組芝居がやっていたということを改めて感じました。

加納 我々に共通しているのは、古典といわれているものは、過去のものであるから、今とは風俗も違うし価値観も違う。でも当時の人たちは同時代の現代劇として見ていたんだろうな、というのを、今の人にも感じてもらいたいということ。

それを感じさせるために、使っているものを変えて、今の人が実感できるものに置き換えちゃう。これは小道具だけじゃなくて、音楽だったり、衣裳を変えたりとかっていう発想ですね。

木ノ下 はい、そこは僕がすごく影

響を受けた部分なのかもしれないし、気が合うところですね。そして、やみくもに現代的にしているわけではない。つまり、歌舞伎を現代演劇としてみていた、150年ぐらい前の人の体感を、今のお客さんに追体験してもらいたいと思っているところも同じですね。

加納 そこは大きいですね。





公演情報はぬり絵の後にも掲載しています

発売中

まつもと市民芸術館プロデュース
『松本のオフィーリア』

8月27日(木) 19:00、28日(金) 14:00、
29日(土) 14:00、30日(日) 13:00
小ホール

作・演出：益山貴司

出演：

高橋彩香 中野亜美 神野幹暁 東 倫太郎
櫻井拓斗 細川貴司 平栗あつみ

料金：全席指定(税込)

一般 ¥4,000/U25 ¥2,000/障がい者割引 ¥3,500

※未就学児入場不可

※U25 (25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認をご提示ください。

《障がい者割引の注意事項》

- ・当日障害者手帳をご提示ください。
- ・移動に介助が必要な方には、介助者1名につき一般料金の50%を割引いたします。
- ・まつもと市民芸術館チケットセンター(窓口・TEL)にてご購入ください。ネット予約不可。



今号の金メダルシールは
2026年6月12日(金)~9月6日(日)
安曇野ちひろ美術館にて開催される

ようこそ！ザ・キャビンカンパニー新収蔵作品展
ーがっこうにまにあわない・ゆうやけにとけていくー

とのコラボレーション企画として
いわさきちひろ作「シクラメンと猫」をオマージュした限定シールです。

シールをはるところ

シールは「まつもと市民芸術館」でもらえるよ(先着500名)

Information

SIDE

A

B

『Catwalk／ねこあるき』Vol.10

2026年 7月3日発行

発行 まつもと市民芸術館
〒390-0815

長野県松本市深志3丁目10番1号
Tel 0263-33-3800 Fax 0263-33-3830

E-mail mpac@mpac.jp
URL <https://www.mpac.jp>

デザイン 清水貴栄・小林慎太郎

印刷 藤原印刷株式会社

※禁無断転載

■郵送サービス

『Catwalk／ねこあるき』の郵送をご希望の方は、
郵送費用分の切手(1号180円)を下記へお送りい
ただければ送付いたします。その際、お名前・ご
住所・何号をご希望かを必ずご明記ください。

〒390-0815 長野県松本市深志3丁目10番1号
まつもと市民芸術館 広報誌担当 宛

『Catwalk／ねこあるき』は、まつもと市民芸術
館のほか、市内公共施設、市内飲食店、全国の
劇場施設などに置いてあります。

■チケット購入・お問い合わせ

【まつもと市民芸術館チケットセンターのご案内】

①電話 0263-33-2200(10:00-18:00)

②インターネット <https://www.mpac.jp>
(要事前会員登録・無料)

③窓口 芸術館1階(10:00-18:00)

【芸術館チケットクラブのご案内】

※まつもと市民芸術館ホームページよりご登録ください。

※インターネット予約が可能(一部公演をのぞく)。

※メールマガジンにて最新のチケット情報や公演案内を配信。

■アクセス

【バス】JR松本駅お城口(東口)より、
駅前バスターミナルから「市民芸術館前」下車

【徒歩】JR松本駅お城口(東口)から
「あがたの森通り」を東へ800m、徒歩10分

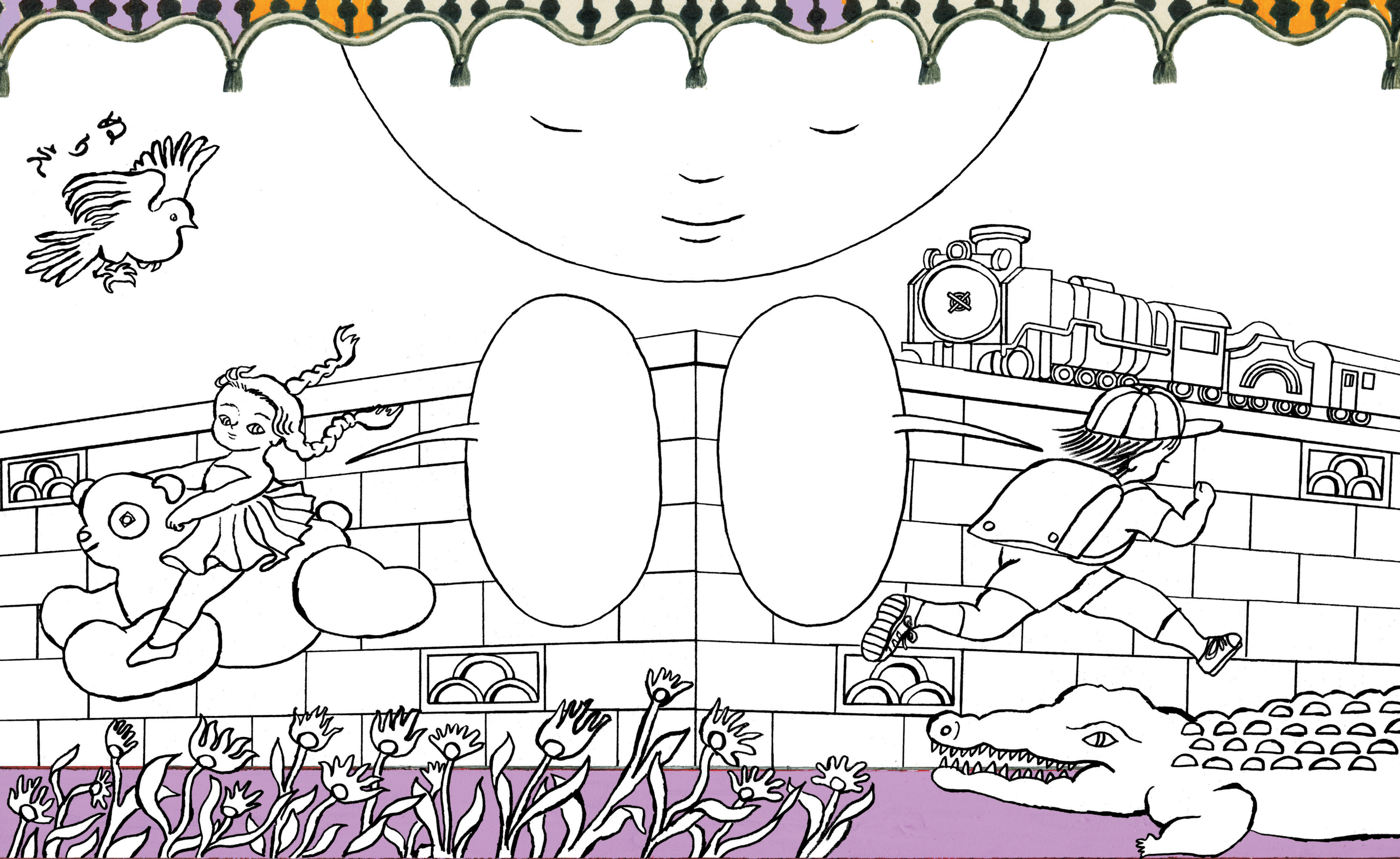
※駐車場の用意はございません。

公共交通機関や有料駐車場をご利用ください。

※近隣商業施設等への無断駐車は

他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください。

『Catwalk／ねこあるき』は、まつもと市民芸術館の広報誌です。『Catwalk』は芸術館の情報『ねこあるき』は街の情報を中心に紹介し、両側から読めるようになっています。またCatwalk(=キャットウォーク)とは、劇場のステージや客席の上のスタッフしか歩くことのない細い回廊のことを言います。



ここは「つづきの劇場」です。役者たちに 色とセリフが まだ ついていません。

つづきを かいて 劇を 完成させてください。完成できたら 金メダルシールを もらえます。

発売中

まつもと市民芸術館プロデュース 木ノ下歌舞伎『心中天の網島』 アクセシビリティ版

作：近松門左衛門
監修・補綴：木ノ下裕一
演出・作詞・音楽：糸井幸之介
出演：
日高啓介 湯川ひな 伊東沙保
西田夏奈子 武居 卓 緒方壮哉 大鷹明良 ほか

松本公演 小ホール

7月10日(金) 14:00、11日(土) 14:00、
12日(日) 13:00

料金：全席指定(税込)
一般 ¥4,500/U25 ¥2,000
障がい者割引 ¥4,000/セット券 ¥8,000

※未就学児入場不可
※U25(25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認証をご提示ください。
※セット券は予定枚数に達したため販売終了

東京公演 吉祥寺シアター

8月5日(水) 18:30、6日(木) 14:00、
7日(金) 14:00、8日(土) 13:00/18:00、
9日(日) 13:00

料金：全席指定(税込)
一般 ¥5,000/U25 ¥2,500/障がい者割引 ¥4,500

※未就学児入場不可
※U25(25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認証をご提示ください。

《障がい者割引の注意事項》

- ・当日障害者手帳をご提示ください。
- ・移動に介助が必要な方には、介助者1名につき一般料金の50%を割引いたします。
- ・まつもと市民芸術館チケットセンター(窓口・TEL)にてご購入ください。ネット予約不可。



公演情報はぬり絵の後にも掲載しています

発売中

木ノ下裕一セレクト 花組芝居 『レッド・コメディ〜赤姫祀り〜』

7月17日(金) 18:30、18日(土) 13:00
小ホール

脚本：秋之桜子
構成・演出：加納幸和

料金：全席指定(税込)
一般 ¥4,500/U25 ¥2,000/セット券 ¥8,000

※未就学児入場不可
※U25(25歳以下) チケットは枚数限定・前売のみ、
また当日年齢確認証をご提示ください。
※セット券は予定枚数に達したため販売終了



2024年初演より(撮影：古元道広)

7月4日発売

チャオ!バンビーニ2026夏 『ローリーの怪奇骨董お話し箱』

8月6日(木) 13:00/16:30
小ホール

出演：ROLLY

料金：全席指定(税込)
一般 ¥3,000/U25 ¥1,000

※3歳以下入場不可
※U25(25歳以下) チケットは当日年齢確認証をご提示ください。

おやこ券 ¥3,500(正価 ¥4,000のところ)

※前売券及びまつもと市民芸術館
チケットセンターのみ取扱。
※おやこ券は、
一般：1名+U25：1名の
ペア券です。2名様一緒に
入場してください。
※予定枚数に達した時点で
販売終了となります。



それでも、猫が好き。

小島 有



最近、Kibiによく立ち寄り、まち猫のゴマ。縁側から「にゃー。」と鳴き、ミルクを催促してきます。ゴマとの交流が仕事や生活の合間の癒しの時間になっています。



東アジア文化都市 2026 松本 開幕!!



撮影・山田毅

5月とは思えないほどの強い日差しと暑さに包まれる中、「東アジア文化都市2026松本」がいよいよ開幕を迎えました。

開幕前日の5月16日には、松本市音楽文化ホールで前夜祭コンサートを開催。ホールオルガニストの山田由希子さんをはじめ、ジョン・ハオさん、イ・スンジェさんの3人による歌とオルガンの美しい共演が披露され、開幕への期待を高めました。

開幕式当日は、本町から大名町まで「イーストアジアストリート」として歩行者天国になり、伝統芸能のパフォーマンスや飲食・物販ブースが並び、多くの来場者でにぎわいました。その後、信毎メディアガーデンを出発したオープニングパレードは、ブラバンドを先頭に松本市長や松本市ブランド大使の松重豊さんらが参加し、沿道から大きな声援が送られる中、松本城へと練り歩きました。

そして、夕暮れの中、松本城の雄大なシルエットを背景に高々と開幕が宣言され、「東アジア文化都市2026松本」の華やかな幕開けとなりました。

「東アジア文化都市2026松本」は12月まで、市内各所でさまざまな関連事業を開催します。ぜひ会場へ足を運び、東アジアの多彩な文化に触れてみてください。



@東アジア文化都市2026松本



芸術館ゆかりのアーティストが選んだ

松本うまいもん

翁堂駅前店は、松本で昔から親しまれている大盛ナポリタンで有名な老舗喫茶店、和洋菓子店なのですが、私は松本に通い出した頃からこちらの時事ネタを取り入れたおもしろケーキやクッキーの大ファンです。何か大きなニュースなどがあれば、次の日にはケーキに反映されていたりします。昔懐かしい素朴な味わいと、独特のセンス！お土産に是非。



倉田 翠
芸術監督 [舞踊部門]



青山様 ぼんぼん

松本の子供たちの夏の行事といえば、青山様とぼんぼんです。どちらも江戸時代末期ごろから旧城下町で始まり、現在は広い範囲で行われています。

青山様は男の子の行事です。青々とした杉の葉を盛り、「青山神社」という小さな幟を立てた神輿を担いで、「青山様だい、わっしょいこらしょ」と掛け声をかけながら町内をまわり、各家から祝儀を貰います。この神輿が「青山様」で、青杉は先祖の霊を迎えるものといわれます。

ぼんぼんは、女の子が紙で作った花を頭に飾り、浴衣に提灯をさげ「ぼんぼんとても今日明日ばかり、あさっては山のおれ草」と町内を歌い歩きます。哀愁を帯びた曲調は、先祖の霊を鎮めるものといわれます。

青山様とぼんぼんは、地域によって違いはありますが、かつては8月上旬からお盆頃までに行われました。現在は子供たちの状況に合わせて時期や時間帯が早まったり、掛け声や歌が録音になっているところもあります。



写真提供||松本市文化財課

「おやきと、コーヒー」の店の前から撮影したもの。左手に田辺薬品が見える。あの2階の窓から、芸者達が道ゆく人を眺めていたかもしれない。



〔浅間温泉編〕

松本に暮らす人々にかつての街の風景について取材をし、創作した演劇作品「まつもと、景の声」は、2025年2月、まつもと市民芸術館2階のオープンスペースで上演されました。「まつもと、景の声」の構成・演出を担当した藤原佳奈が、その派生企画として、松本の今と昔の風景について綴っていきます。

松本の奥座敷として、古くから親しまれてきた浅間温泉。私も松本に移住してからというもの、日常的に足を運んでいる場所だ。2021年、当時まつもと市民芸術館総監督の串田和美さんがディレクターを務める「FESTA松本」というイベントのフリンジ部門に参加し、浅間温泉について取材をして「あさまごと※」というイベントを開催したことがある。当初は、浅間にチンチン電車が走っていた頃の風景を調べていたのだが、取材を進めていくと、浅間温泉にはかつて沢山の芸者衆が在籍していたことを知る。全盛期であった昭和初期には芸者の数は100人を超え、置屋の数は20軒近くあったという。今や静かな温泉街、というイメージしか持っていなかっただけに驚き、その賑わいがどんなものだったのか、興味が湧いた。

浅間温泉のお座敷文化は、昭和初期から戦争へ向かう時代の流れとともに一時は縮小したものの、戦後の高度経済成長期（昭和30～45年代頃）の団体旅行ブームによって、宴会文化として再び賑わいを見せたそうだ。当時の様子をよく知る人に聞いたとこ

ろ、「繁忙期にはお座敷で宴会をして、翌日は黒部ダムへ向かう団体客を、各旅館でトコロテンのように押し出して」いかなければならないほどの賑わいだったらしい。昭和40年代に幼少期を浅間温泉で過ごした男性に話を聞くと、「近所を歩けば芸者さんがいるのが当たり前の風景として育って、幼い頃は芸者のお姉さんたちに抱っこしてもらったりずいぶん可愛がってもらった」と、懐かしそうに思い出を語ってくれた。

浅間温泉にある田辺薬品の2階は、かつて芸苑組合の稽古場だった。階段を登っていくと、今でも芸者たちが稽古した舞台や楽屋がそのままの形で残っている。2026年から、2階はギャラリー烏兎社としてオープンし、誰でも足を運べるようになっているので、興味がある方はぜひ実際に訪れてみてほしい。

路地のあちこちから、カランコロンと下駄の音が鳴り響く。風呂へ急ぐ芸者たちの姿。白粉の香り。小気味よい三味線の音。酔っ払った客の笑い声。取材をしてからというもの、浅間温泉を訪れた時は、かつての風景を想像しながら歩くことにしている。

綴る「まつもと、景の声」

藤原佳奈 戯曲作家・演出家。わたしたちの〈はたらき〉を聴き、上演の場をひらく。2020年より長野県松本市在住。2024年秋より、劇場実践の場「松のにわ」を始動。毎月最終水曜日に出席番丸西で「米はある!」を主催。多分野で協働しながら、身体へのまなざしを分析し、再編を試みる「アートプロジェクトひとひと」を進行中。

※参考：松本経済新聞松本・浅間温泉で「野菜プロジェクト」が体験型イベント 架空の宴で地域を感じる <https://matsumoto.keizai.biz/headline/3428/>

まつもと暮らし

松本に移住された方を紹介する企画。今回は、松本市内でかご専門店「世界のかご カゴアミドリ」をご夫婦で営む、伊藤征一郎さんにお話を聞きました。



アルプスごはん

生産者の顔が見える地元野菜を中心にしたメニューは、身体と心にやさしく、いつも小さな感動があります。



フランス式階段工

知人が遊びに来たときの、ドライブコースに。川辺に座って、松川パン商店さんで買ったサンドイッチを食べるのが至福の時間です。



鉢伏山

自宅の窓からよく見える一番身近な山。毎年3月、残雪の春山登山に行くのが楽しみの一つ。



山と川を身近に感じて暮らしています

かごの産地に店を構えたい

東京・国立にかごの専門店を構えて10年たったとき、新型コロナの影響で海外はもちろん、国内の産地にさえ足をはこぶことができない時期が長く続きました。ならば、産地にちかい場所に、新たな店を構えることができないか？と発想転換をしてみることにしました。いくつかの候補地の中から選んだのが、松本でした。

もともと取引のある作り手さんが松本周辺に多くいたことや、民藝、工芸、クラフトなど、さまざまな手仕事とかかわりが深い土地であることに加えて、素材となる植物が育まれる環境を近くに感じながら生活ができることも魅力のひとつでした。

2022年3月に松本店をオープン。その後2年ほど、単身で東京一松本の二拠点生活を続けたのち、2024年夏に東京の店を閉め、家族3人で移住することにしました。



暮らしはじめてわかった街の魅力

実際に住みはじめてみると、街の通りのひとつひとつに個性があって、古い建物と並んで人々の暮らしぶりが感じられるのもおもしろく、つつい遠回りして歩きまわってしまいます。いたるところに湧水を汲める場所があったり、農家さんとの距離が近いことも、毎日の生活の安心感につながっている気がします。東京のスーパーでは長野産のお米を目にする機会がなかったのですが、今は地元のおいしいお米をいつも食べることができて、消費量はだいぶ増えました。空気もすごくおいしいです。

仕事の面では、地元の作り手さんとより深い関係を築くことができるようになり、木工職人や林業に携わる方と会う機会が増え、樹種や森に関する知識も身についてきて、ますますやりがいを感じています。

近隣で店を構えている人たちの存在も大きく、何か困ったことがあればお互いに相談できるような雰囲気があって、そういった繋がりのおかげで街の魅力の一つになっているのかもしれない。

伊藤征一郎 1970年生まれ。趣味は山歩くことと、川をながめること。アウトドアメーカーに勤務のあと、2010年 東京・国立市に「世界のかご カゴアミドリ」をオープン。2022年3月、松本に2店舗目を開店。2024年、家族で松本に移住。松本市大手1-3-28 神山ビル2階 11:00-17:00 火・水定休 URL / <https://kagoami.com/store/>

熱情の果てに

―松高事件のあらまし―



大正15年頃の松本高等学校校舎



当時の学生の様子（ストーム練習の風景）
※ストームとは旧制高校の学生寮などで行う蛮行のこと。パンカラの一種。寮歌などの歌と、踊りを伴う「バカ騒ぎ」が基本。

画像提供＝旧制高等学校記念館

松高事件（松高思想事件）は、1930年（昭和5）から1940年にかけて、旧制松本高等学校で起きた、5回にわたる思想弾圧事件です。

第一次世界大戦（1914-1918）後、日本は深刻なインフレに陥り、米騒動など全国的な暴動が次々と起こります。一方でロシア革命（1917）による社会主義国家の誕生は、日本の学生や知識人に衝撃を与えました。1918年（大正7）、東京帝国大学に新人会が結成されたのを皮切りに、全国の大学、専門学校、旧制高校に次々と社会科学研究会（社研）が発足し、社会主義思想の研究、啓蒙活動を行いました。1922年の共産党結党以後は、共闘路線を歩み、次第に実践活動へと傾斜していきます。しかし、1920年代後半から1930年代にかけての、共産党への激しい弾圧（3.15事件、4.16事件）は、各校の社研へも及んでいくことになります。

松本高校では、1925年（大正14）に、社会科学研究会が誕生します。27年に学校の干渉により活動停止となりますが、29年（昭和4）、村上康也、久保速雄を中心とする十数名によって再結成されました。翌30年、メンバーが共産党の選挙組織（選挙闘争同盟）に関わったことがきっかけとなり、第1次松高事件が起きます。検挙者16名のうち、起訴2名（懲役2年、執行猶予3年）、起訴猶予6名。学校の処分は、退学8名、停学9名でした。続く第2次松高事件は、第1次の活動を再建していくなかで起きます。熊田正一、福島一郎、細野武男、

真島正四郎、小林吾郎、鈴木一男、桜井藤夫を中心に、共産党組織（日本共産青年同盟）へ参加してアジビラの配布、機関誌の販路拡大の役を担い、学内では『松高新聞』の発行、読書会を組織するなど、学内外で活動を繰り広げますが、32年（昭和7）、メンバーは検挙されました。検挙者16名のうち、執行猶予9名。学校の処分はありませんでした。これだけの活動をしながらかつたのは、検挙後一ヶ月にわたる学内外の救援活動、同窓会支部、学内の校友会、サークルなどの陳情・嘆願のおかげだったと考えられています。

第3次松高事件は、第2次の桜井と熊田、宮下武平、桂芳久、速水正夫を中心として、共産党、左翼文化団体と連携するとともに、学内では、『メザマシ新聞』、『マッブル』、『マッブス』、『文化の旗』などの雑誌を発行し、軍教反対、言論集会研究の自由、帝国主義戦争反対を訴えました。33年（昭和8）、検挙されたのは28名。うち起訴5名（懲役2年、執行猶予4年）、起訴猶予5名。学校の処分は、退学5名でした。

第1次から第3次までは、共産党との共闘の中で起きましたが、第4次、第5回は様相が異なります。すでに共産党は壊滅的な打撃を受けて存続すら危ぶまれており、各校の活動も鎮圧されているという状況だったからです。

第4次松高事件は、佐藤太郎、尾崎盛光を中心に、井出武三郎、須田四郎、水谷温、青森政文、中川英夫、中谷哲士がメンバーでした。佐藤の個人的な繋がり、沼田秀郷（唯物論研究会）の指導のもと、活動の準備をしていたところ、沼田の検挙に連座するかたちで、39年（昭和14）に検挙されました。検挙者8名のうち、起訴2名（懲役1年半、執行猶予2年）、起訴猶予6名。学内の処分はありませんでした。特別高等警察（特高）は決して監視の目を緩めなかったのです。

第5次松高事件は、第4次の佐藤、須田、青森、中谷（共に東大進学）と、宮内裕、塩原昇、小池浩、川原真澄、上村独がメンバーでした。塩原が思誠寮誌『思誠』に投稿した「早春賦」という詩が特高の目にとまり、40年（昭和15）に検挙されました。検挙者22名のうち、起訴5名、起訴猶予6名。学校の処分は、退学者5名（依願退学）でした。第5次もメンバーは活動をしていませんでした。特高の調書には、「駅伝復活闘争」と記されています（長年開かれていなかった寮対抗の駅伝大会を復活させただけです）。不穏分子は根こそぎ葬り去ろうという姿勢には身震いをしてしまいます。

新しい世界を希求し、次代を担う者としての自負と責任をもって注ぎ込まれた松高生たちの熱情は、ここに終焉を迎えることになりました。

渡邊匡一（信州大学人文学部教授）

参考文献
『われらの青春ここにありき』（松本高等学校同窓会 1978）
『松高事件資料集』（旧制松本高等学校記念館 1986）
『戦時下学生の抵抗運動』（大橋周治編 1992）

「松高事件」から着想を得た『松本でしか創れない新作演劇』『松本のオフィーリア』この夏上演！
（公演詳細は14ページ）

まつもとー、まつもとー

このアナウンスを聞くことは、あずさが終点の松本駅に着いたことの句読点として、僕はいつもひとり楽しんでた。アナウンスの声は遠く上高地へと抜けていくようでもあり、日本アルプスからの風を迎えるようでもあって、僕はこのアナウンスのファンのひとりだった。ある時、そのアナウンスが終わると聞いた時は、アナウンスの声のまつもとー、の余韻が静かに消えていってしまうような寂しさを感じた。でも、あの声が復活したという。遠くに飛んでいってしまった小鳥が近くの木に戻ってきて、こちらに向かって囀りをはじめてくれた時のような、うれしい気持ちが湧いてきた。

これからはずっと、あの爽やかな風のような声が松本駅に棲む小鳥のように、いつまでも旅人や住まう人を迎えてくれますようにと思っています。

minä perhonen デザイナー 皆川 明



photo/Minami Takashi



松本市美術館
「つぐ minä perhonen」展
(2026年4月～6月)より



楽譜制作＝信長貴富

わが国では、行商の売り声(「竿竹～」「石焼き芋～」など)や、相撲の呼び出しなど、言葉の抑揚と日本の伝統的な旋法(いわゆるヨナヌキ音階など)が結びつき、独特の節回しを持つものが数多く残っています。昔ながらの駅名アナウンスもそのひとつですが、「まつもと～」は際立って印象的です。理由は2つあると思います。まず、この女性の声質がクリアで、歌声のような響きを持っていることが挙げられます。駅の雑踏の中でも、思わず耳を傾けたいくなる美しい声。この澄んだ声質が、松本の凜とした空気と結びついて、駅を降り立った人びとの印象により深く残るのかも知れません。さてもう一点。この節回しが、楽譜に書けるくらい明瞭な音程とリズムを持っていること。この点は他の駅アナウンスに例を見ない特徴です。楽譜に書き起こしてみたので、皆さんもぜひご唱和ください。まつもと～。

作曲家 信長貴富



それぞれの まつもと～、

駅名を告げるアナウンスはどこの駅にも流れている。たいていは聞き流され、列車を降りれば忘れてしまう。けれど、松本駅のあの声は他とは少し違って、牧歌的で、ゆっくりとしていて心に残る。その少し違うひっかかりが、松本の魅力を高めてきたのではないだろうか。

松本の観光というと、松本城、美術館、アルプスの山々を思い浮かべることが多い。けれど旅の経験は、目で見えるものだけではない。松本城の砂利を踏み音、街なかを流れる水の気配、少し訛りのある人々の会話。こうした街を形づくる音の風景—サウンドスケープもまた、旅の気分を高めてくれる。その中でもあのアナウンスは、街のランドマークならぬサウンドマークと言えるかもしれない。松本の街へ出る前に、まず耳で松本に出会う。橋を渡る、門をくぐる、坂を越えるといった小さな通過の経験が、旅や参詣の気分を切り替えるように、あの声は、松本に入るための音の到着儀礼なのかもしれない。

一方で、松本に暮らす人にとってあの声は生活の音である。家族の見送り、通勤や通学、帰省や出張から

の帰り道。暮らしの様々な場面で、あの声を繰り返し聞いてきた。普段は聞き流していても、遠出から戻ってきた時など、ふと「ああ、松本に帰ってきたな」と感じたことはないだろうか。あるいは、誰かと「あのアナウンス、独特だよ」と話したことがある人も多いだろう。特別な文化財ではないし、立派な観光施設でもない。けれども、まちの人たちが生活の中で繰り返し聞き、記憶し、語り合ってきたことで、地域にとっての小さな遺産“everyday heritage”になっている。こうした日常の小さな遺産が、地域アイデンティティや場所への結びつきを支えていると指摘する研究も多い。

この小さな遺産は、近年関心が高まっている生活文化観光にも繋がる。名所旧跡を訪ねるだけでなく、地域で育まれてきたさりげない生活文化に触れることが、今人々を惹きつけている。松本駅のアナウンスは、松本に暮らす人たちにとっては松本への愛着を再確認させ、観光客にとっては旅の気持ちを高める音でもあったのだろう。「まつもと～、まつもと～」は控えめに、けれど確かに松本という街を支えてきたように思う。

信州大学人文学部教授
岡本卓也



帰ってきた 「まつもと〜、まつもと〜」



昭和50年ごろの特急あずさと松本駅(提供=松本市立博物館)



「まつもと〜、まつもと〜」。松本駅のホームに降り立つと、どこか懐かしい響きが耳に届く。旅の始まりを告げるような、あるいは故郷に帰ってきたことを知らせてくれるような雰囲気のある独特な節回し。この名物アナウンスは長年にわたり多くの人に親しまれ、松本駅の風景の一部となっていた。その声が聞こえなくなったのは2025年11月。放送機器の老朽化に伴う設備更新により、40年あまり続いた名物アナウンスは終了した。ところが、その知らせに寄せられた反響は予想以上だった。松本市によると、「市長への手紙」は13件、電話による問い合わせも10数件。市民だけでなく観光客からも惜しむ声が届いたという。

そして2026年5月1日。名物アナウンスは駅東西自由通路で復活した。わずか半年。しかし再びあの声を耳にした瞬間、多くの人の胸に懐かしさが込み上げた。なぜ私たちは、この声に、これほど心を動かされるのだろうか。

国鉄時代から続く声

この名物アナウンスが放送され始めたのは1985年(昭和60)ごろと推測されている。JR東日本長野支社広報によると、当時の詳細な記録は残っていないという。時代は、国鉄が駅の自動放送を本格的に導入し始めたころだった。それ以前の松本駅では、駅員による肉声の駅名アナウンスが行われていた。自動放送の導入にあたり、オーディションで選ばれた声優・沢田敏子さんのもとには全国各地から録音依頼が寄せられたという。

その中で二つの駅には特別な注文があった。東京・上野駅には「郷愁」を。そして松本駅には「旅情」を。担当者からそんな要望が伝えられていたとされる。「まつもと〜」の響きには、単なる案内放送を超えた味わいがある。旅先へ向かう高揚感。アルプスを望む城下町への憧れ。帰ってきたという安堵感。たったひとりの駅名に、さまざまな感情が込められているようにも感じられる。

市民の声が後押しした復活

それから40年あまり。放送機器の老朽化に伴う設備更新により、JR松本駅での名物アナウンスは終了した。しかし、「聞けなくなるのは寂しい」そんな声が市や駅へ寄せられた。松本市公共交通課も復活の可能性を模索し、音声を管理する東京俳優生活協同組合と協議。その結果、音源を無償で使用できることになった。名物アナウンスは、駅構内ではなく、改札を出た先にある松本市管轄の東西自由通路で復活する。放送されるのは、特急あずさ、特急しなのの到着から約3分後。ホームから改札へ向かう人が、少し歩みを緩めても耳にできるようにという配慮だ。

耳だけではなく、心に響く心地よい音のゆらぎ

復活工事を担ったのは、館内放送や案内システムなどを手がけるサスナカ通信工業株式会社だ。営業の木藤岡譲さんはこう語る。「我々が気を使ったのは、駅の放送と重ならないことでした。なるべく音量を抑えながら、それでもしっかり聞こえることが大切です。自由通路は開けた空間なので騒音もあります。耳に届きやすい高音質のスピーカーを設置し、音量調整にも気を配りました」
地元企業として、名物アナウンス復活に協力できる

ことをうれしく感じていたという。

では、なぜあの声は人の心に残るのだろうか。木藤岡さんは『1/fゆらぎ』という言葉을挙げる。「分析したわけではありませんが、あのアナウンスにも、人が心地よいと感じる『1/fゆらぎ』があるのではと思うんです」

波の音や風の音、小川のせせらぎにも見られるとされる『1/fゆらぎ』。人が自然と心地よさを感じる。だからこそ、あの声に安心感や懐かしさを覚えるのかもしれない。

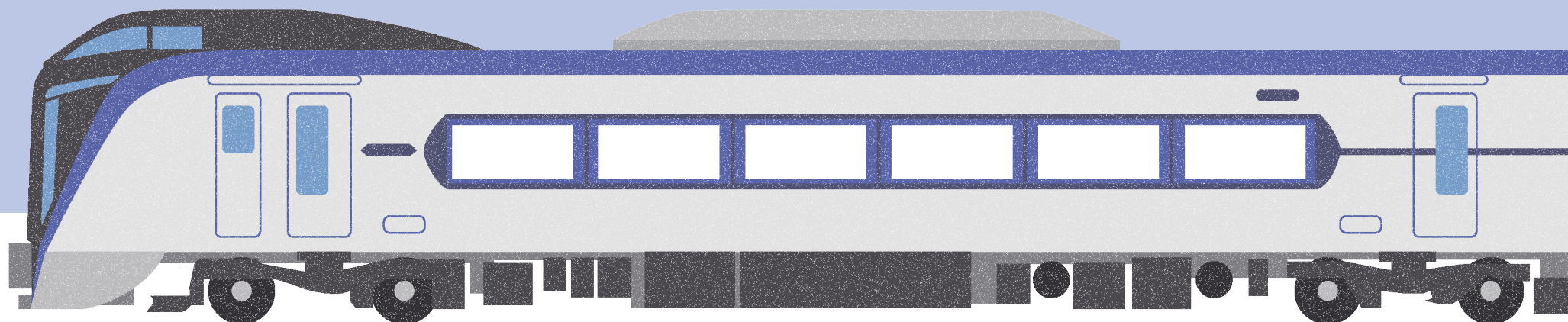
旅の始まり。旅の終わり。誰かを迎えた日。誰かを見送った日。私たちは知らず知らずのうちに、その時々を記憶を駅の風景や音と結び付けている。

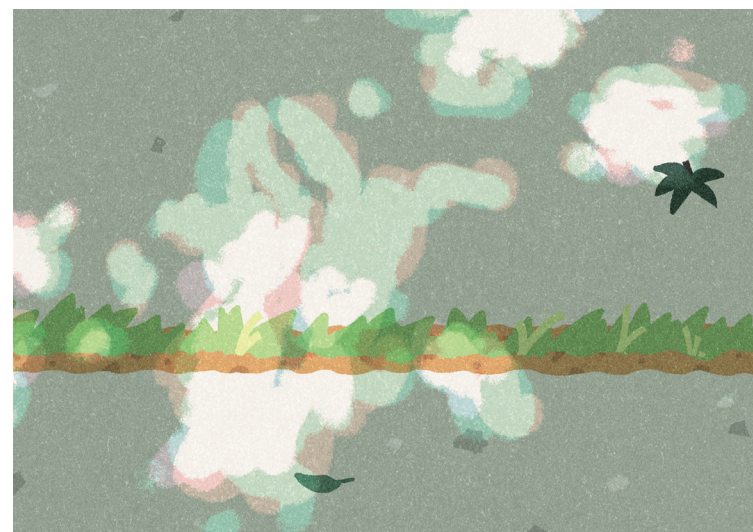
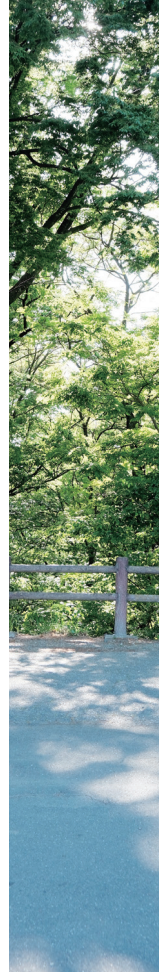
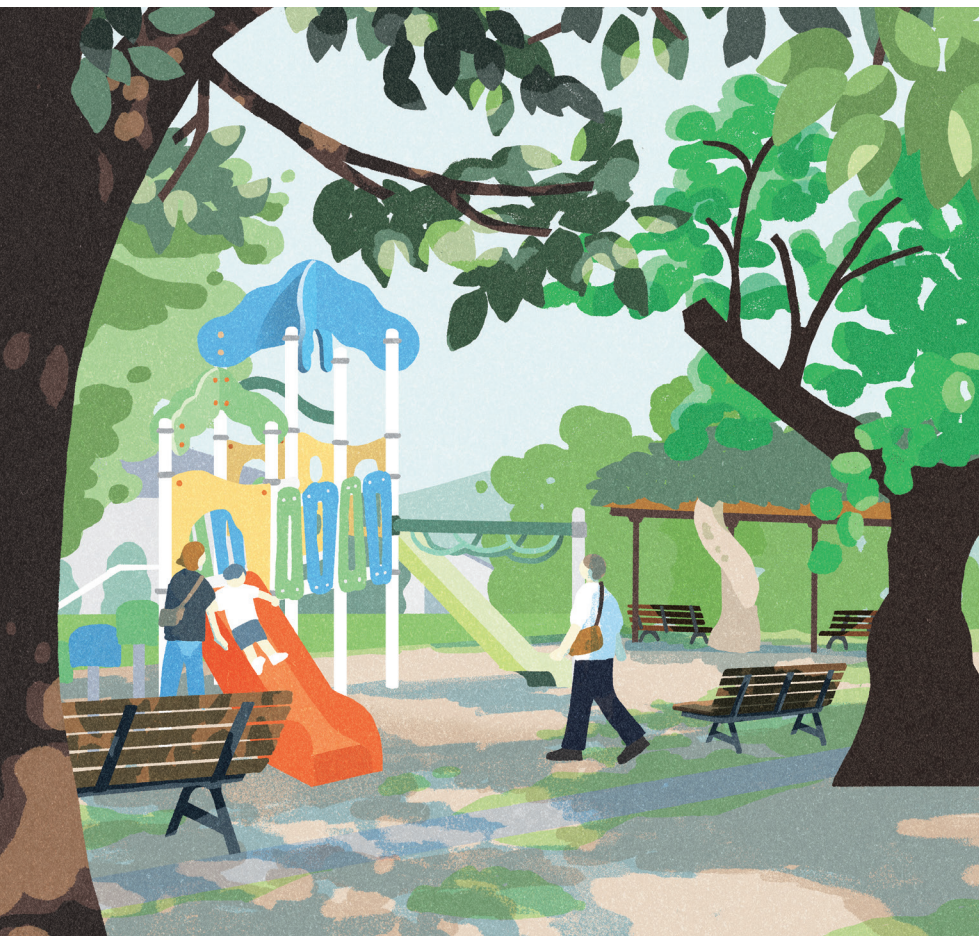
サウンドスケープという言葉がある。風景を見るように、音もまた地域の景観を形づくるという考え方だ。松本駅の名物アナウンスは、松本を訪れた人びとの記憶をつなぎ、この街の日常を静かに支える「音の風景」なのだ。

放送回数	特急名	到着時刻	◎放送時刻	放送間隔(分)	備考
1	しなの	9:08	9:11		
2	あずさ	9:38	9:41	0:30	
3	しなの	10:05	10:08	0:27	
4	あずさ	10:23	10:26	0:18	
5	あずさ	10:37	10:40	0:14	白馬行
6	しなの	11:05	11:08	0:28	
7	あずさ	11:39	11:42	0:34	
8	しなの	12:04	12:07	0:25	
9	あずさ	12:37	12:40	0:33	
10	しなの	13:05	13:08	0:28	
11	あずさ	13:36	13:39	0:31	
12	しなの	14:03	14:06	0:27	
13	あずさ	14:35	14:38	0:32	
14	しなの	15:05	15:08	0:30	
15	あずさ	15:39	15:40	0:32	
16	しなの	16:04	16:07	0:27	
17	あずさ	16:39	16:42	0:35	
18	しなの	17:04	17:07	0:25	
19	あずさ	17:37	17:40	0:33	
20	しなの	18:04	18:07	0:27	
21	あずさ	18:29	18:32	0:25	
22	あずさ	19:41	19:44	1:12	
23	しなの	19:46	19:49	0:05	
24	あずさ	20:42	20:45	0:56	
25	しなの	20:45	20:48	0:03	
26	あずさ	21:46	21:49	1:01	
27	しなの	21:49	21:52	0:03	
28	あずさ	22:40	22:43	0:51	
29	あずさ	23:49	23:52	1:09	

※特急に遅れが生じても、放送時刻は変更しません。

放送時間のタイムテーブル





高いところから街を見る

松本に遊びにきてくれた人をひと通り案内した後、もし時間があれば連れて行きたいのは城山公園だ。春は桜の名所として有名で、初夏からは緑がもりもり生い茂って気持ちがいい。公園で遊ぶ子ども、犬と散歩をする人、展望台でぼんやり景色を見る人などがちらほらいて、特に平日はゆったりしている。1875年に松本で最初にできた公園なのだろう。

なんといっても、公園の端の高台にある螺旋階段の展望台を見てほしい。まさに360度ぐるっと松本の景色を見渡せる。北アルプスも美ヶ原の山々も見える。犀川を目で追いながら安曇野の方までスイっと見通せて、普段は車で走る道を上から見ると「こうなっているのか」と思う。風の強い日は吹き飛ばされそうでちょっと怖い。高所恐怖症の人は要注意だ。

どこへ行っても景色を上から眺めてみたいと思う。わたしの住んでいる家はあっち、いつも通っている場所はそっち。昨日行った山は青白く絵のようになってしまい、さっき遊んだ川は街をぐねぐね流れているし、明日通る予定の道はあんなに遠くにある。子どものころ訪れたときはただの「高いところ」だったが、大人になってからの方が発見が多くて見飽きない。ディティールを知るほど、遠くから見たときに面白いのかもしれない。



Illustration & Text
otama

太田真紀／イラストレーション、ビジュアルストーリーテリング、またそれらを軸としたデザインなどが得意。デザインファーム・Takramでの勤務を経て、2021年4月よりイラストレーターとして独立。松本に住んでいますが、まだまだ知らないことばかりです。
otama-ki.com

「特集」

帰ってきた「まつもと〜、まつもと〜」

vol.
10

2026
Summer

ねこまつもと

